

イワクラ学のステップ (2)

鈴木 旭

イワクラ学のステップ (2)

本学会報序文では『イワクラ・サミット』という形で始まったイワクラ(磐座) 探査の実践的課題を具体的に取り上げてきた。磐座とは何かという基本的命題の追求に続いて、「ペトログラフィ問題」という形でブレた状態があるがままに書き表し、軌道修正したつもりである。

さて、そうして到達したイワクラ探査の実践的課題こそ、実は「磐座とは天体に浮かぶ星座を地上に模写したものである」ことを明らかにすることにあった。私の友人、グラハム・ハンコックに言わせるならば、あらゆる謎の古代遺跡が「天の鏡」になっているのを明らかにすることだ。

グラハムは彼の日本語翻訳者大地舜と相談の上でやったことと思われるが、「天を写す鏡」へブン・ズ・ミラー」を文字通りに「天の鏡」と直訳した。それもそのはずで、夜空に輝く星が、そのまま地上にコピーされたような状況が発見されたのであった。

グラハムは友人のロバート・ボークアルが「エジプトの三大ピラミッドがオリオン座の三つ星に対応しナイル川が天の川を反映している」と主張するのを聞いて驚いた。それまで耳にしてきた考古学の常識と違って、天空の姿を反映していると言うのであった。

しかも、天文シミュレーション・ソフトで歳差運動による天と地の実際の位置関係のズレを修正計算すると、何と紀元前一万五〇〇年の星空と完全に一致したの

だ。その上、春分の日には夜明け前の真東の空に獅子座が登るというおまけ付きであった。

これらのことから、グラハムは紀元前一万五〇〇年の春分の日、スフィンクスが真東の空に上がる自分の分身と向かい合った時、巨大なピラミッド群がナイル川の辺で天界の星座を地上に写し出し、何事かが行われた、と信じたのである。紀元前一万五〇〇年！

ボストン大学の地質学教授ロバート・シヨック博士がスフィンクスの建造年代に対して疑問を投げかけていたことも彼の知的活動を刺激した。シヨック博士は随分前から純粹に科学的な見地からスフィンクスの年齢は少なくとも数千年は古くなると見ていた。

つまり、スフィンクスの表面に何千年もの間、大雨が降り続けな

ければできないはずの深い縦縞の溝と波打つ水平のくぼみを発見したため、スフィンクスの建造起源が大幅に遡るのではないかと、という疑いを抱いていたのである。

こうなると、エジプト第四王朝のファラオ、カフラー王が紀元前二五〇〇年頃にスフィンクスを建造したとか、三大ピラミッドをカフラー王ら三人の王がそれぞれ墳墓として建設したという伝説も怪しくなってくる。

ではいったい、誰が、何のために、この巨大な謎の建造物ピラミッドを建造したのか。この時、ヒントになるのが二万五九二〇年の歳月を費やして星座が復活するという歳差運動の法則であったとグラハムは語る。

復活するということは元に戻るということだ、古代エジプト人た

ちが、その壮大なる運動法則の中に特別な意味を見出していたとしても不思議はない。そこでグラハムは大胆に推理する。

古代エジプト人たちは、歳差運動という壮大な宇宙の運動法則の基点になる紀元前一万五〇〇年以來、長い年月を通して時を超えて連なる人々に何かを伝えようとしているのではないだろうか、と。ピラミッドは、その伝達システムではないのか、と。

さらに言う。世界各地に残る意味不明の古代遺跡は、いずれも古人のある意図を伝えるためのシステムではないだろうか、と。これは多くの人々の共感共鳴を呼んだ。だからこそ、その著『天の鏡』は『神々の指紋』に続くベストセラーになったものと思う。

それはともかく、グラハムの主張はわれわれイワクラ・サミットの参加グループ「山添村いわくら文化研究会」の地元、奈良県山辺郡山添村の神野山・鍋倉溪においても確認された。それは『イワクラサミット山添大会』において発

表された通りである。

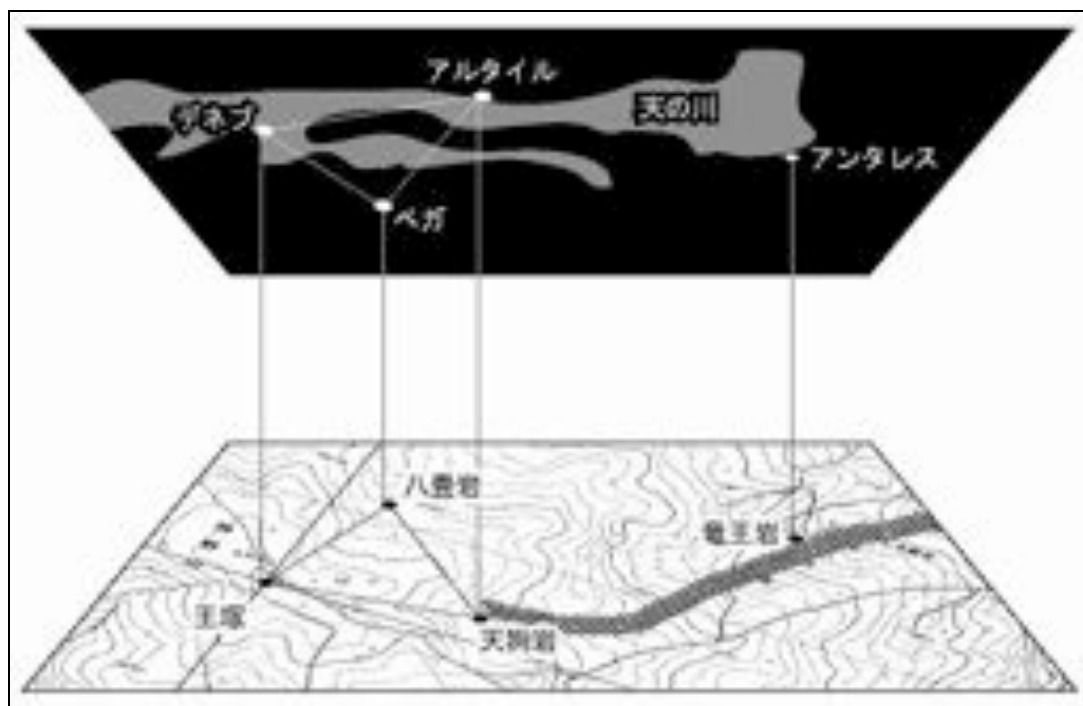
それは近々、『学会誌』という形で集約されて他の発表者の論稿と併せて一冊の単行本になり、一般書店において発売される予定であるが、とりあえず先走って紹介すると次の通りである。報告者の柳原輝明さんが書き著した論稿に従って書き進めて行きたい。

「この神野山のいたるところに巨石が存在し、その中でも圧巻は幅一五メートル、長さ六五〇mにも亘って巨岩が川のように連なる『鍋倉溪』である。巨石たちは何も語らず、ただ静かに気の遠くなるような年月を過ごしてきたのであろう。

最近になって、神野山にある巨石たちを地図に落とし、それらと天空の星が重なり合うことが明らかになってきた。これは単なる偶然とは思えない」

何を言っているか、お分かりであろう。グラハム・ハンコックが天空に輝く星座を地上に写す鏡という意味で古代遺跡を『ヘブンズ・ミラー』（天の鏡）と表現し、

イワクラ学会会報



写真：山添村で発見されたイワクラと星の関係図

エジプトのピラミッドやアンコール・ワットの例を挙げたことと同じ事を指摘していたのである。

つまり、率直な表現をすれば、山添村にもヘブン・ズ・ミラーがあったというわけである。いまでも、詳しく見て行けば理解できるだろう。

神野山山中の巨石群と天空の星との対応関係がはつきりしているのは、天の川と七夕の星、冬の大三角形と言われるシリウス、ペテルギウス、プロキオンの三つの星と北極星である。これら以外にも天空の星と対応しているのではないかと思われる巨石が存在するが、まだ調査途上である。

いずれにしても、具体的な位置関係については「神野山のイワクラと星との対応」図を参照していただくとして、山添村におけるヘブン・ズ・ミラーを発見する件について述べる柳原さんの生々しい体験談をそのまま紹介すると次の通りである。

「鍋倉溪とその周辺の巨石を地図の上に落とし何気なく眺めていた

時、突然鍋倉溪が天の川ではないかという思いがひらめいた。まさかと思いつつ、市販の天空図を買ってきて地図と重ねてみた。若干の違いはあるものの、以下のような対応が見られた。

- ・天の川と鍋倉溪
- ・神野山頂上の王塚と白鳥座のデネブ

- ・天狗岩と鷲座のアルタイル
- ・竜王岩とさそり座のアンタレス

あまりの符号に鳥肌がたつ思いがした。偶然と言うにはあまりにも不思議である。三つの巨石と四つのポイントが天空の星と一致することなど偶然にありうることであろうか」

随分、長い引用になってしまったが、とにかく、人工的に据えられたものであると考えなければ説明できない。柳原さんが「偶然と言うにはあまりにも不思議である」と語るのには当然であろう。さらに感動的なのは、紀元前二〇〇〇年紀の北極星を発見した時の体験であろう。

GPSを手にして神野山山頂を

通る経度一三六度零分の線上を歩き回り、北極星探索に乗り出したところ、大小二つのイワクラを発見した。そのことについて、「当初あまり気にもとめていなかったが、ステラナビゲーターで時代をさかのぼった時、紀元前二〇〇〇年頃から紀元前三〇〇〇年頃の北極星であった竜座のトウバンの形に酷似していることが分かり、愕然とした。・・・これから判断すると、神野山の北極星を写したと思われるイワクラは、紀元前二〇〇〇年の北極星トウバンを地上に写したものでないかと想定できそうである」

これはあつさりと言いつ放つていけるが、重要な意味を持つてくることになるかもしれない。というのは、私自身、随分前のことであるが、平成三年春、黒又山ピラミッドの調査に関わりを持った時、調査団の一員が黒又山周辺の祭祀場の位置関係を測定したところ、どうしても南北の祭祀場だけが悉く時計の反対回りに五度傾くので、悩んでいた。

直ちに天文シミュレーションに取り掛かり、五百年単位で時代を遡って行ったところ、小熊座のアルファ星が消え、竜座のアルファ星が天の北極に入り込み、紀元前二〇一一年にはほぼ天の北極から五度西辺したところに落ち着いたのであった。

その結果、われわれ調査団は北極星を基準として祭祀場を配置した可能性があることを否定できないと報告したのであった。同じことは、この山添村でも見られるように、北極星は一つの基準として注目しておいてよさそうだ。

ところで、山添村のヘブン・ズ・ミラーの発見は元を辿って行くと、「クロマンタ原理」の適用実験がきっかけになっている。天空の世界と地上世界が対応していることをごく当たり前のこととして受け入れてきたからこそ、今回の発見を導く手法をすんなりと導入することができた。

こういう創造的な姿勢なくして、われわれのイワクラ探査活動は一步たりとも進まない。よくよく学



図：神野山のイワクラと星との対応

ばなければならぬ姿勢というか、心構えというか、精神というか、態度のような気がする。そもそも前例のない遺跡調査をするわけなので、参考にすべきテキストがないわけである。

一つひとつ、自分で考えて答を出して行かなければならない。

地上世界には、まだまだわれわれの気が付かない謎がたくさん隠されているような気がする。まだまだ謎解きの旅は始まったばかり。多くの皆さんの積極的参加を期待して、とりあえず、私の『イワクラ学のステップ』は筆を置くことにする。

イワクラ学会は生まれたばかりである。古代祭祀学をベースとしながらも、あらゆる学問、科学と技術を包括して行く体系になっているような気がする。懐が深い学問体系になっているような気がする。あらゆる人々の参加を期待したい。